

今塚遺跡の再検討とその性格について

植松 晓彦

1 はじめに

近年、発掘調査の増加に伴い山形盆地南半（古代出羽国最上郡）の奈良～平安時代の遺跡の様相が徐々に明らかになっている。筆者も本地域の遺跡調査に携わる機会を得、特に山形市北部の今塚遺跡では木簡、墨書土器等の官衙的な遺物が出土し、報告書において「遺跡の性格については（中略）文字資料等から推測して、一般農村と規定するよりは役所的な機能を備えた集落、或いは祭祀関連の集落」と結んだ（須賀井・植松 1994）。

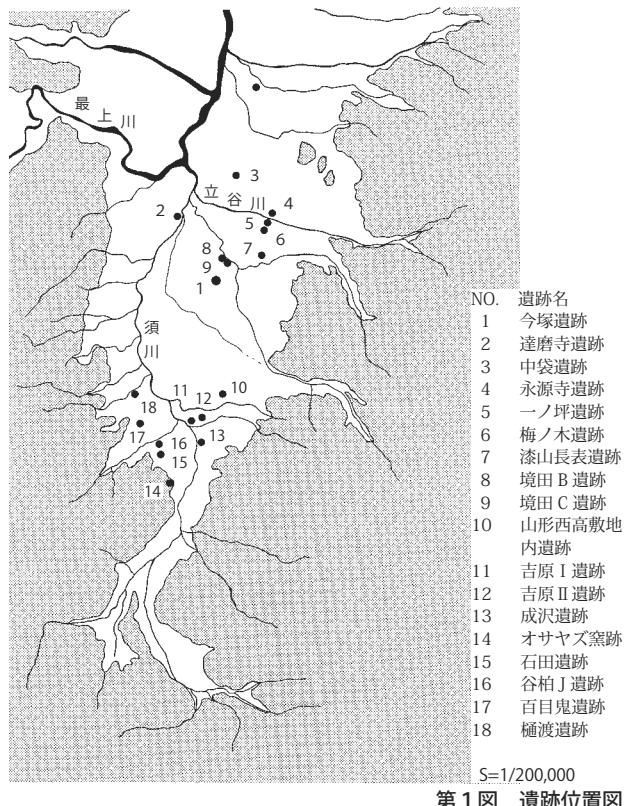
しかし、遺跡は遺構的には掘立柱建物跡で構成されるものの、規模や規格性に乏しく所謂官衙遺跡と呼ぶには躊躇がいる。本稿では今塚遺跡の遺物や遺構を再吟味し、近年の調査で事例が増えた周辺遺跡の比較等も踏まえて、遺跡の性格や最上郡内に於ける位置付けを検討する。

2 研究史と土器編年

今塚遺跡は山形市北部の今塚地区に位置し、馬見ヶ崎川左岸の自然堤防（微高地）上に立地する。周辺には古墳時代の国指定史跡の嶋遺跡や特異な棟持柱建物が検出された長表遺跡が分布する（第1図）。調査では遺跡範囲の南半7,800m²が対象で、古墳時代前期の竪穴居跡を主とする集落や河川跡、平安時代を主とする掘立柱建物や縦柱建物跡、井戸跡、溝跡等が検出された（第15図）。

古代の遺物では溝跡から出土した①「仁寿三年」(853年)の郡符木簡や兵士の食糧支給等の木簡、②「生・一麗」等の同一字種の一括墨書土器、③「調所」の墨書土器、④「一等書生伴」の墨書ある人面土器が注目された。

このうち①については報告書付編で平川南氏が検討を加え、本遺跡を「役所（性格不明）の一部」と考えている（平川 1994）。②については報文では祭祀的な遺物としたが、近年横山昭夫氏も陰陽道に関わる墨書土器として紹介した（横山 1998）。また、北村優季氏は「高」墨書土器の出土から関東地方「高麗」の移植民に関わる可

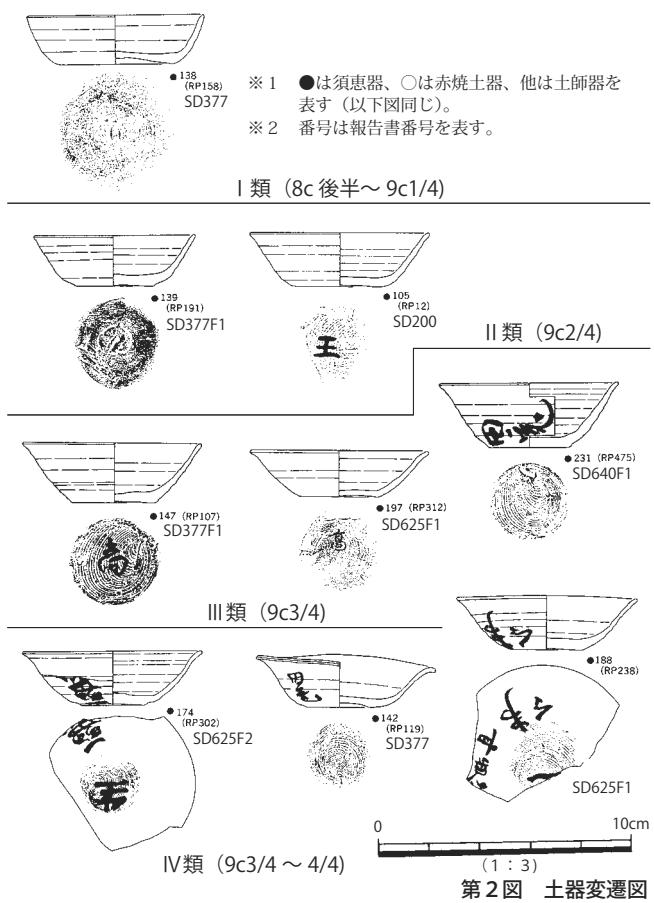


第1図 遺跡位置図

能性も言及している（北村 1997）。この他、報告書では本文中で主要な墨書土器に留めた釈文を山形県埋蔵文化財センターが中心に『山形県内出土古代文字資料集成』で報告書分の釈文を全て列記した。（尾形他 1998）。

また、伊藤邦弘氏と筆者は『山形県の官衙関連遺跡』の集成で、県内の官衙関連遺跡中でも上位に位置付け、後述する遺跡類型化を行った（伊藤・植松 1998）。同検討会では、山中敏史氏が③から国府関連の役所、④から郡書生の居宅の可能性を言及した（山中 1998）。

一方、遺物相については、報告書で一部「形態的に古い様相を示す」ものもあるが、①等から「出土土器は9世紀代が主体で10世紀まで下るものは認められない」と年代観をまとめた。佐藤庄一氏や阿部明彦氏・水戸弘美氏、筆者も各報告書等で、①が出土するSD 967と並走するSD 377溝跡の土器群に概ね9世紀中葉（9世紀第2～3四半期）の年代観を立て、当該期の基準資料としている。（植松 1997・佐藤他 1998・阿部他 1999）



第2図にはこれらに準拠して本遺跡で最も出土量の多い須恵器壺を基準に本稿における土器編年観を示した。

3 墨書土器の再検討

今塚遺跡では、古代の土器が溝跡等を中心に油脂箱で約50箱出土した。特にSD625・377(SG200)の溝跡からは多様な字種を含む墨書土器が一括して出土し、本遺跡の性格を考える上で多くの知見を与えてくれる(第3～5図。報告書追加再録)。報告書では事実記載に留めたものが多い墨書土器群について、再度検討を行う。

墨書土器については、報告書では主だったものを取り上げ、考察で「墨書文字・記号集成」を表した(第6図)。

本稿では、報告書作成当時は肉眼観察であったが、赤外線カメラ等を用い、一部報告墨書土器に修正加筆等を行い再録した(第7図)。また、報告書で掲載できなかつた分も含め全ての墨書土器を集めて(第11図)し、判読可能なものを表(第8～10図)にし、報告書未掲載の字種等を各字主な1点を実測(第12・13図)し、集成図(第14図)を作成した。

詳細は別稿に譲るが、これら集成表等からは、各遺構

毎に字種や時期に一定の傾向が窺えた。更に遺構毎に土器が集中出土した地点をプロットする事で、同一字種の偏りがある事等も分かった。以下に上記の墨書土器で遺跡の性格等を示唆する字種を取り上げ、概略を記す。

A 「生・一麗」関連の一括墨書土器群 SD625の「22～32Gに位置する窪地状の落ち込みに密集」し、「意識的に一括廃棄した状況」が看取られる墨書土器群で、「生・一麗」等の同一字種60個体以上が出土した(第3図)。報文では「一括出土状況から祭祀的な様相窺い知れる」とまとめた。

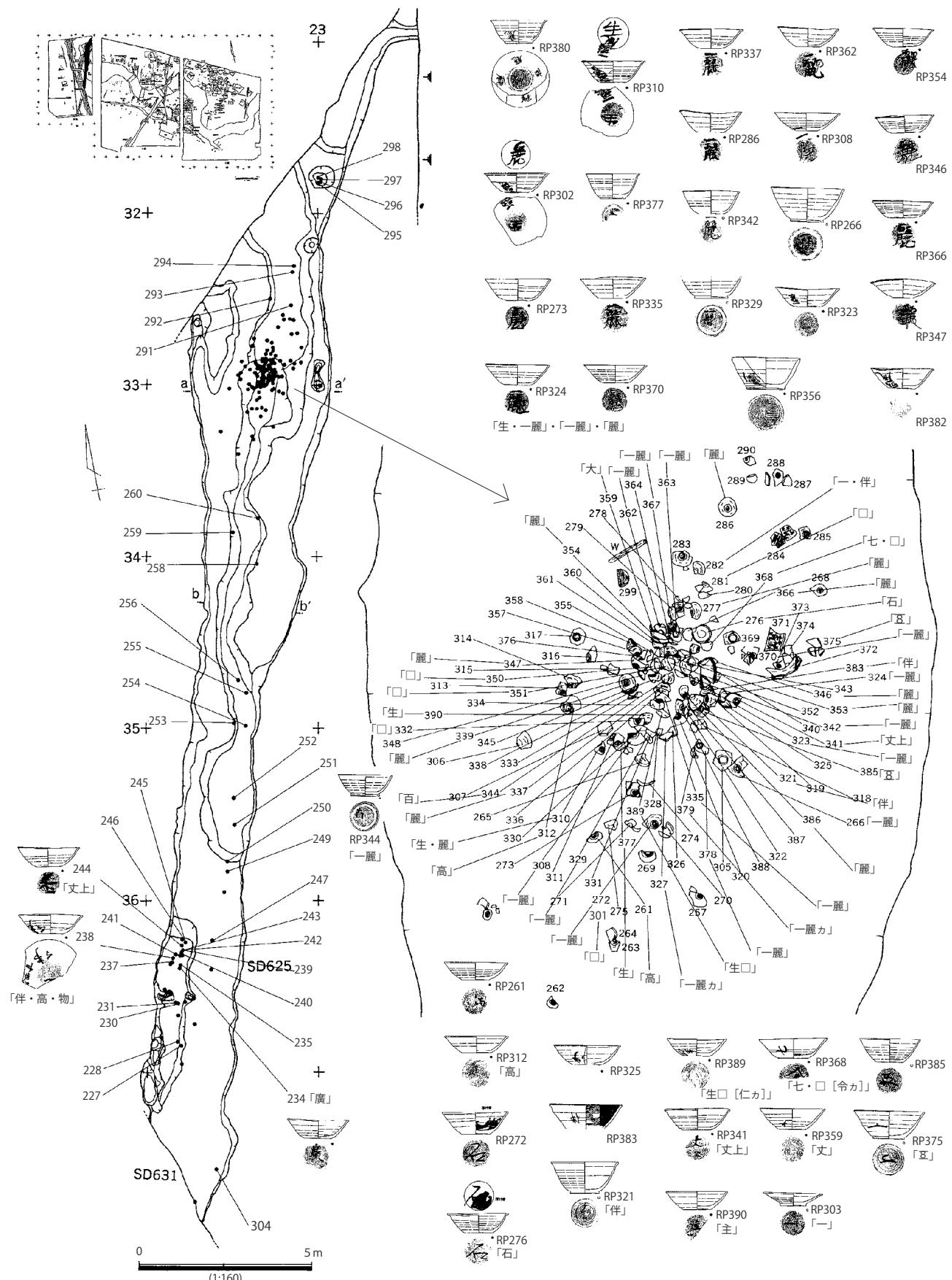
今回、再度字種の観察を行い幾つかの知見を得た。①同一字種にも字体により達筆な字体から崩し字、一部簡略化のもの等に分類可能で、②数量は前者が散見的で、後者ほど数量が多い(第6図)。③達筆な「麗」(第7図:報205)¹⁾上部を観察すると、一般的な「丽」ではなく「丽」で、所謂呪符(符籙:水野1997)に類する字種の可能性があり、④須恵器高台付壺の器種に限られ、墨書部位も特異性が窺える(底部「生」・体部4面対「一麗」)。

これらを概観すれば、①と②から丁寧で達筆なものが少数手本(報205・紀3)として書かれ、それを複数人物が模写し崩れ一部字体が簡略化される状況が推測される。③と④からは見本となる報205等の特異性やその出自、使用法等について様々な示唆が得られる。

具体的な祭祀の内容については、字種自体の類例がなく判断に窮するが、近年研究が進む水辺祭祀の何らかの「禊・祓い」に関わる一例と考えたい。その理由は出土遺構が浅い溝跡で水辺に関わり、③の「生」を中心とした「一麗」の字種構成等が「人心や社会情勢の穢れを清浄化」を意味すると捉えるからである。更に一括廃棄状況や①の組成や偏りから少数の上位識者とそれ以外の集団により水辺で供物を捧げる供膳具として墨書土器が用いられ、使用後に一括廃棄(祓い)された状況が窺える。

B「調所」銘の墨書土器 SG200より出土し、古代税収の「調」を納めた「所」と推測される(第4・6図)。報告書では木簡や墨書土器と共に『「調所」や「書生」』という文書作成に関する文字資料』から、遺跡の性格を「役所的な機能を備えた集落」とした。

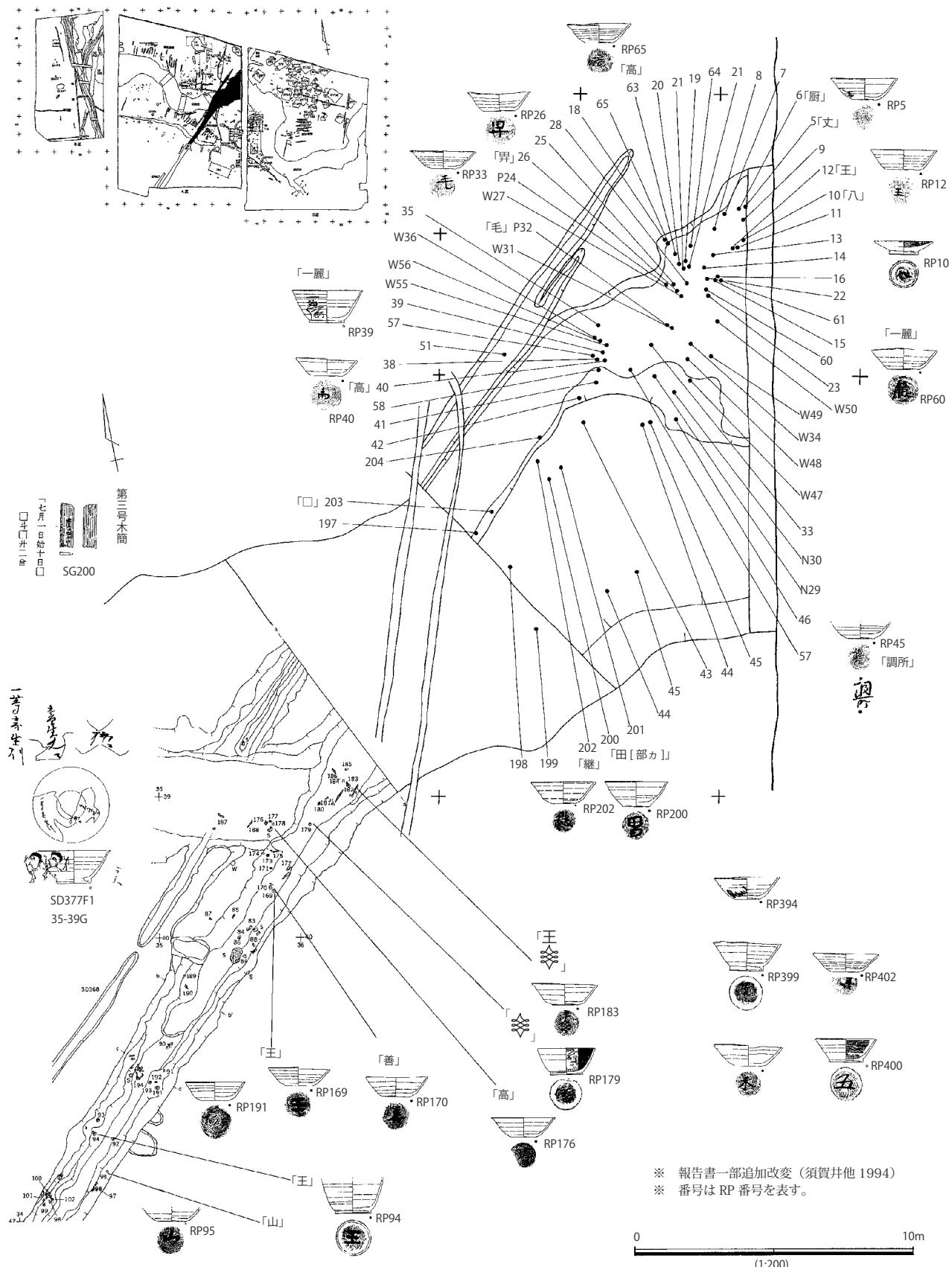
「調」は古代出羽国では狭布・米・穀の三種である。8世紀後葉からは、「調」が遠国に限られ蝦夷への夷禄に充てる等の理由から、隣国陸奥国と並び自國で利用



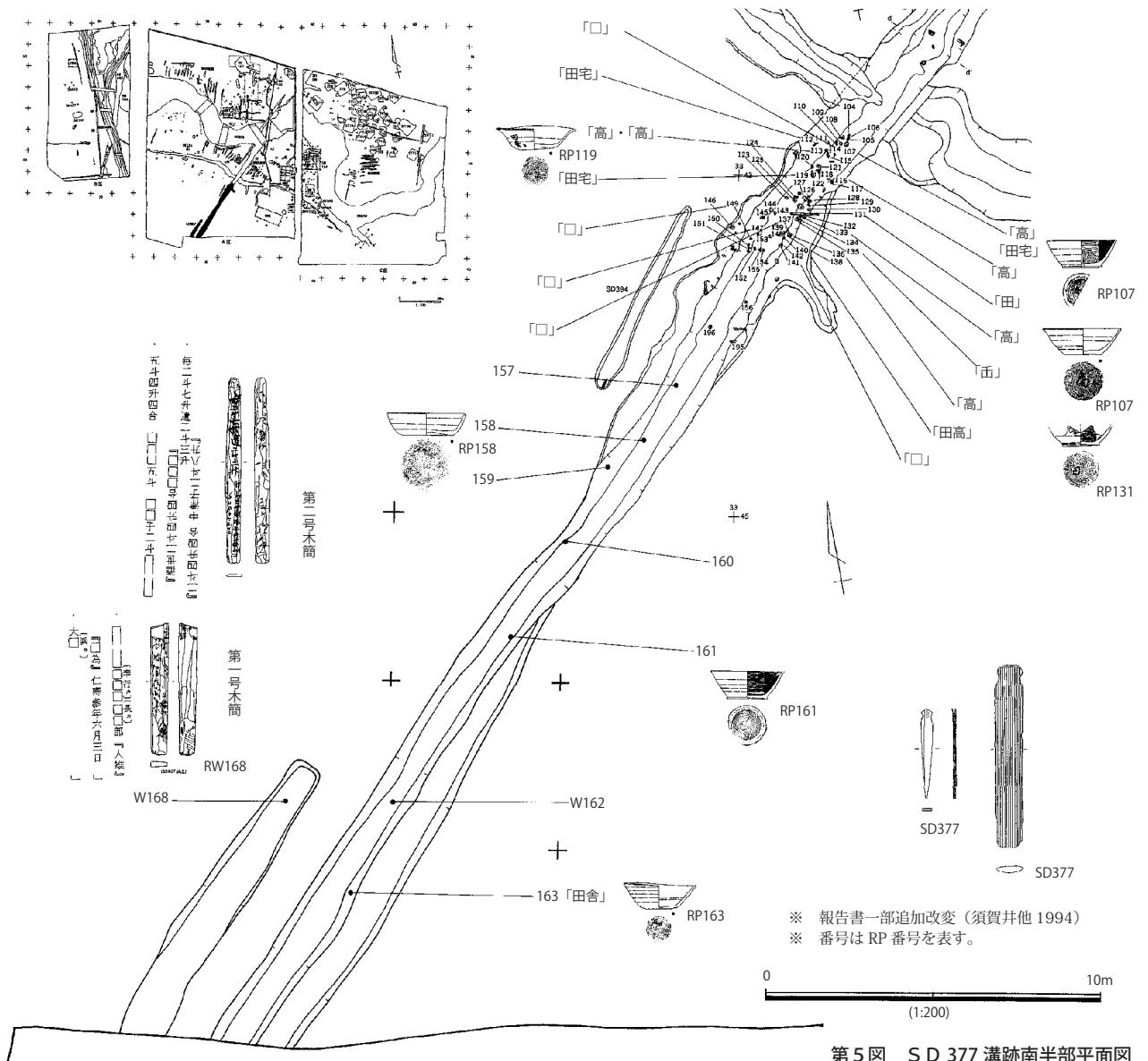
※ 報告書一部追加改変（須賀井他 1994）

※ 番号は RP 番号を表す。

第3図 SD 625 溝跡平面図



第4図 SD 377 (SG 200) 溝跡北半部平面図



第5図 SD 377 溝跡南半部平面図

する他国には見られない規定が設けられる。また、SG 200に連なるSD 377(第4図:同一遺構の可能性)²⁾では「田宅」(報239)や「田舎」(紀580)等の「田」と「宅」・「舎」の建物に関わる墨書き土器の共伴、後述する米の支給に関わる郡符木簡の記述等と合わせて考えれば、出羽国の「調」の中でも米(白米・玄米)・穀(穀殻:佐藤1997)を収納管理した可能性が推測される。

C「一等書生伴」銘の墨書き土器 SD 377中央部から出土し、本稿で赤外線カメラで実測図に一部追加・修正し再録した(第4図)。外面に人面墨書きと対側に墨書きの一部、内面体部横位に「一等書生伴」、同部縦位に「□等書生丈部」、「□」の文字が確認できた。これらの文意は報文「文書作成に関わる文字資料」として留めた。

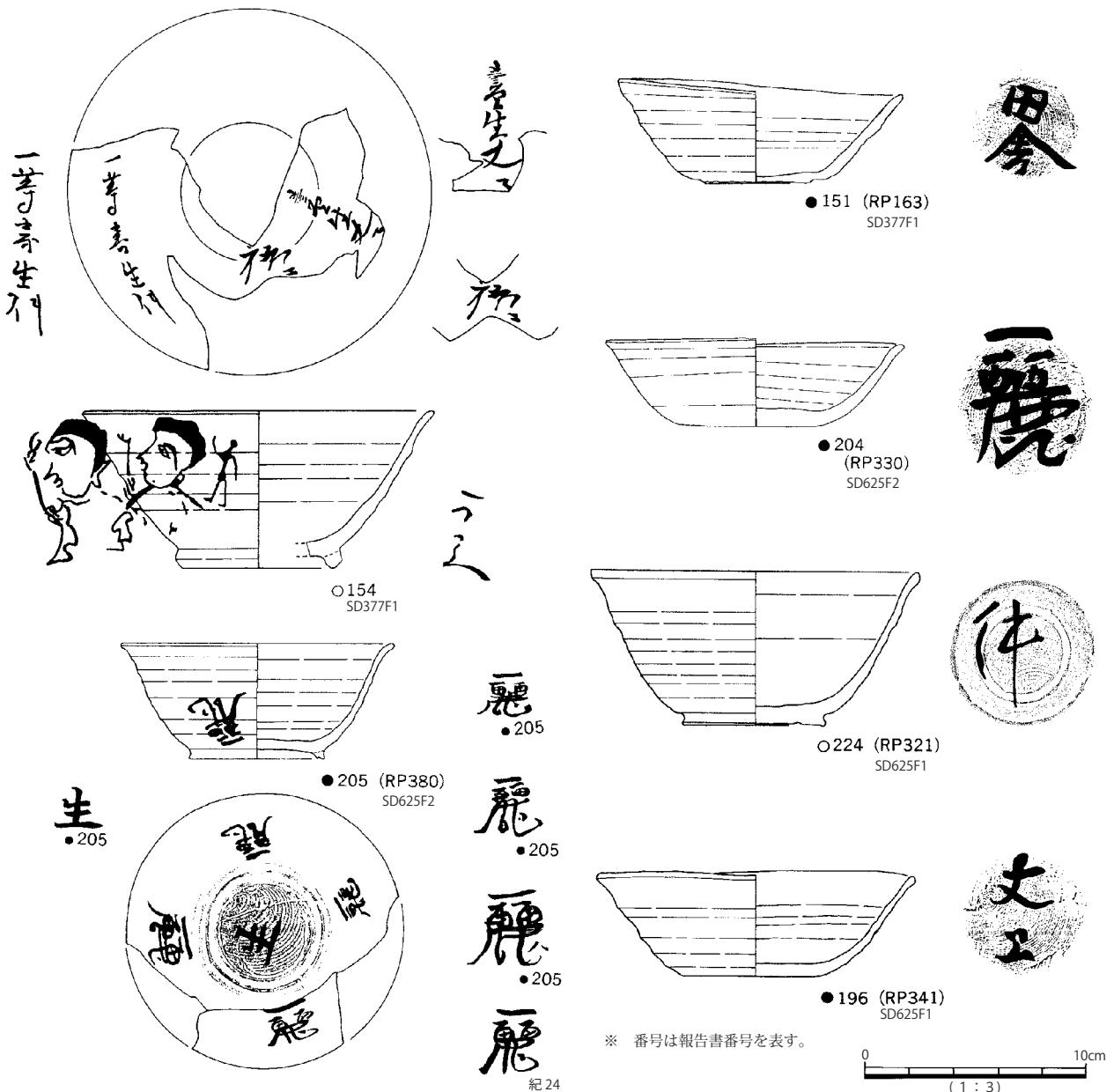
具体的には「一等/書生/伴(丈部)」と分けられる。

「一等」は『軍令』に官人の職務に応じた等級を付す規定があり最も高い等級にあたる³⁾。「書生」は、地方官人の職制で弘仁13年(822年)太政官符『郡雜人』に「郡書生」がみえる。郡書生は郡毎に規模に応じて定員が規定され(佐藤1997)、本遺跡の主体である9世紀中葉(863年:村山分郡以降)には、最上郡は8郷(『延喜式』)で『戸令』により中郡に相当し、規定では4名置かれる。

「伴」は「大伴」氏の弘仁年間(823年)の改名による姓名と推定され、最上郡では承和11(844)年「外従八位伴部道成」が「吉弥候」姓を賜り、元慶2年(878年)の元慶の乱で「擬大領伴貞道」が560名の兵と共に国府より秋田城に派遣された資料がある。これは当時の最上郡内に郡司クラスの在地勢力「伴」氏の存在を窺わせ、郡司以下の郡雜人「郡書生」にもこれら在地勢力の



第6図 報告書墨書文字・記号集成図



第7図 報告書修正図

出自者が関与していた事が推測される。本遺跡では他にも「伴」、「丈」の墨書き土器が一定量出土し、土器群の年代(850年前後)的にも上記「書生／伴(丈部)」の墨書き土器に関わるものと判断される。

一方、外面の人面墨書きは横向の二人の人物、後に線状に小人物が表される。前者の服装は頭に樸頭、服装は袖の長い衣袍を着用し、手に幣を持ちかざす様子が観察され、これらは官人層の仏教以外の宗教祭祀の行為を表現していると考えられる。また、内面の人名数等から描かれた官人が書生「伴」・「丈部」氏の可能性や、前述符録に類似する「麗」墨書き(陰陽道系)との関連も窺える。

D木簡 SD 377 や併走する SD 967 から3点木簡が

出土した(第4・5図)。報告書付編で平川南氏が釈文と解説をまとめている。要約すれば、第1号木簡は、上から下の役所に宛てた下達文書(郡符木簡)で、「仁寿參(三)年六月三日」(853年)の紀年がある。何らかの役職「長」の「□部『人雄』」に宛てられ、「人雄」は自署と判断している。

第2・3号木簡は、古代の役所が食糧を兵士に支給した木簡で、具体的には「酒世」、「中津子」等の人名に、各々「二斗四升四合(240合)」前後の支給額(軍團兵士1日当たり米8合/約30日分)が記され、概ね兵士1年分(約30日勤務)の番上糧に相当するとしている。他に「毎二斗七升(+) 遺二斗三升」(=5斗=1俵)の

墨書字種 (积文)	報告番号	紀要番号	遺構番号	種別	器種	残存率	墨書字体	字体部位	字体規格	R P番号	年代観	付着物	備考
※ 1	※ 2	※ 2	グリッド			※ 3	※ 8	※ 5	※ 5	※ 4	※ 6	※ 7	
生 1-麗		205	528SD625F2	須惠器	环	半完形 外底 外体	小 生 淡	380	III - IV		報告修正 接合		
2-麗		173	529SD625F1	須惠器	环	半完形 外底 外体	中 大 大	濃 濃	310	IV			
3-麗		174	530SD625F2	須惠器	环	半完形 外底 外体	中 大 大	淡 淡	302	IV			
4-麗			1SD625F	須惠器	环	底片	外底 外底	中 大 大	淡 淡	IV		紀 26 接合	
5-麗 一麗			2SD625F 22-33	須惠器	环	底完形 外底 内底	中 大 大	淡 淡	IV				
6-麗			SD625 3F1-F 2 22-33	須惠器	高台环	底完形 外底 外体	小 大	濃 淡	III - IV		紀 25 接合		
7-麗		13	SD625F 22-32	須惠器	环	底片	外底	大		III			
8-麗		15	SD625F 22-32	須惠器	环	底片	外底	大		IV			
9-麗		17	SD625F 22-32	須惠器	环	半完形 外底	大		III				
10-麗		20	SD625F 22-32	須惠器	环	底片	外底	大		III			
11-麗		27	SD625F 22-32	赤焼土器	环	底完形 外底	大		III - IV	淡			
12-麗		23	SD625F 22-33	須惠器	环	底片	外底	大		III	墨		
13-麗		22	SD625F 22-35	須惠器	环	底片	外底	大		III - IV			
14-麗		14	SD625F 22-3 6	須惠器	环	底片	外底	大		III			
15-麗		30	SD625F 22-37	赤焼土器	环	体部片	外体	大		不明			
16-麗		28	SD625F 赤焼土器	环	底片	外底	大		III				
17-麗		12	SD625F1 22-34	須惠器	环	底完形 外底	大		III				
18-麗		31	SD625F1 22-36	内黒土器	高台环	体部片	外底	大		II - III			
19-麗		18	SD625 F1・F 2	須惠器	环	底片	外底	大		IV			
20-麗			SD625 7F1-F 2 22-33	須惠器	环	底片	外底	大		IV			
21-麗			SD625 29F1-F 2 22-33	赤焼土器	环	底片	外底	大		III	淡		
22-麗		8	SD625F2 22-32	須惠器	环	底完形 外底	大		IV				
23-麗		9	SD625F2 22-32	須惠器	环	底片	外底	大		III	淡		
24-麗 墨痕		10	SD625F2 22-32	須惠器	环	半完形 外底 内体	大		IV	淡			
25-麗		11	SD625F2 22-33	須惠器	环	底完形 外底	大		III - IV	擦、淡			
26-麗		16	SD625F2 22-33	須惠器	环	底片	外底	大		IV	煤		
27-麗		4	SD625F2	須惠器	环	底片	外底	大	363	IV			
28-麗		19	SD625F2	須惠器	环	底片	外底	大		IV	墨 硯		
29-麗		21	SD625F2	須惠器	高台环	底片 外底	中		III - IV				
30-麗		5	SD625	赤焼土器	高台环	底片 外底	中	367	III - IV	淡			
31-麗		6	SD625	須惠器	环	半完形 外底	大	378	IV	淡			
32-麗		182	539SD625F1	須惠器	环	半完形 外底	大	362	IV				
33-麗		217	541SD625F1	赤焼土器	环	半完形 外底	大	342	IV	淡			
34-麗		219	542SD625F1	赤焼土器	环	半完形 外底	大	266	III - IV				
35-麗		223	543SD625F1	赤焼土器	环	半完形 外底	大	329	III - IV	淡			
36-麗		175	532SD625F2	須惠器	环	半完形 外底	中 大	308	IV	墨			
37-麗		176	533SD625F2	須惠器	环	底完形 外底	大	273	IV				
38-麗		177	534SD625F2	須惠器	环	底完形 外底	大	370	IV	淡			
39-麗		178	535SD625F2	須惠器	环	半完形 外底	大	286	IV				
40-麗		179	536SD625F2	須惠器	环	半完形 外底	大	335	III	淡			
41-麗		180	537SD625F2	須惠器	环	半完形 外底	大	337	IV				
42-麗		181	538SD625F2	須惠器	环	半完形 外底	大	324	IV	淡			
43-麗		189	540SD625F2	須惠器	环	半完形 外底	中	323	IV				
44-麗		207	544SD625F2	須惠器	环	半完形 外底	大	356	III	煤、朱 報告修正			
45-麗		204	579SD625	須惠器	环	完形 外底	大	330	III	擦、淡			
46-麗		101	513SG200	須惠器	环	完形 外底	大	60	III	IV			
47-麗		116	514SG200	赤焼土器	环	半完形 外底	大	39	III - IV	淡			
48-麗		277	III 22-37	須惠器	环	底完形 外底	大		IV	墨			
49-麗		278	III 22-37	須惠器	环	底片 外底	大		III - IV	淡			
50-麗		330SB 6 EB483F1	須惠器	环	底片	外底 外体	小		III				
51-麗		38	SD625F 22-32	赤焼土器	高台环	底完形 外底	中		III - IV				
52-麗		37	SD625F 22-33	須惠器	环	底片	外底	中		IV			

墨書字種 (积文)	報告番号	紀要番号	遺構番号	種別	器種	残存率	墨書字体	字体部位	字体規格	R P番号	年代観	付着物	備考
※ 1	※ 2	※ 2	グリッド			※ 3	※ 8	※ 5	※ 5	※ 4	※ 6	※ 7	
53麗			32SD625F1	須惠器	环	底片	外底	大		277	IV		
54麗			33SD625F2	須惠器	环	底片	外底	中		337	IV		
55麗			34SD625F2	須惠器	环	底片	外底	大		339	IV		
56麗			35SD625F2	須惠器	环	底片	外底	大		353	IV		
57麗			36SD625F2	須惠器	环	半完形	外底	大		366	IV	淡	
58麗		183	545SD625F2	須惠器	环	半完形	外底	大		347	IV		
59□		184	546SD625F2	須惠器	环	半完形	外底	大		354	IV	擦、淡	
60麗		185	547SD625F2	須惠器	环	半完形	外底	大		346	III		
61麗		186	548SD625F2	須惠器	环	半完形	外底	大		366	IV	淡	
62麗		187	549SD625F2	須惠器	环	半完形	外底	大		382	IV		
63[麗力]		42	SD625F 22-32	須惠器	环	底片	外底	大		IV			
64[麗力]		43	SD625F 22-33	須惠器	环	底片	外底	大		III			
65[麗力]		49	SD625F 22-33	須惠器	环	体部片	外体	中		不明			
66[麗力]		50	SD625F 22-33	須惠器	环	体部片	外体	大		不明			
67[麗力]		47	SD625F 22-36	須惠器	环	底片	外底	中		III - IV			
68[麗力]		46	SD625F	須惠器	环	底片	外底	大		III - IV			
69[麗力]		48	SD625F	須惠器	环	高台环	底片	外底	中	III - IV			
70[麗力]		40	SD625F1	須惠器	环	底片	外底	大		379	IV	淡	
71[麗力]		45	SD625F1	須惠器	环	底片	外底	大		IV	墨	硯	
72[麗力]		41	SD625F2 22-32	須惠器	环	底片	外底	大		IV			
73[麗力]		39	SD625F2	須惠器	环	底片	外底	大		327	III	擦、淡	
74[麗力]		44	SD625F2	須惠器	环	底片	外底	大		III - IV			
75□[麗力]		130	SD625F 22-32	須惠器	环	底片	外底	大		IV			
76□[麗力]		145	SD625F 22-35	赤焼土器	环	底片	外底	大		III			
77□[麗力]		94	SD625F2	須惠器	环	半完形	外底	中		332	IV		
78廣 一麗		76	SD625F	須惠器	环	底片	外底	中		濃 淡	III - IV	煤	未掲示測
79麗		75	SD625	須惠器	环	底片	外底	内底		IV		未掲示測	
80廣			SD625 77F1-F 2 22-33	赤焼土器	高台环	底片	外底	小		III - IV	淡		
81廣		193	564SD625F1	須惠器	环	底完形	外底	中		234	IV		
82□[廣力]		212	SD625F1	須惠器	环	底片	外底	中		III - IV			
83生			52SD25F	須惠器	环	体部片	外底	中		III - IV			
84生			55F・F 1 22-32	須惠器	环	底片	外底	小		III - IV			
85生			53SD25F 22-33	須惠器	环	底完形	外底	中		IV			
86生			51SD625F2	須惠器	环	体部片	外底	小		365	III		
87生			54SD625	須惠器	环	底片	外底	大		IV			
88生		206	531SD625F1	須惠器	环	底片	外底	小		377	III - IV		
89生		284	III 40-37	須惠器	环	体部片	外体	小		不明			
90田舎		151	580SD377	須惠器	环	完形	外底	中		163	IV	報告修正	
91田[舍力]		189	SD377F1 34-43	須惠器	环	底片	外底	小		III			
92□		98	SD625F 22-37	須惠器	环	底片	外体	中		IV	淡		
93舍			191SD377F1	須惠器	环	底片	外体	中		IV		未掲示測	
94田舎		239	577	III 36-47	内黒土器	环	半完形	外底	中		IV		
95田舎		103	510SG200	須惠器	环	半完形	外体	中		394	IV		
96田舎		180	SD377F1 34-42	赤焼土器	环	底片	外体	小		IV			
97田舎		177	SD377F1	須惠器	环	底片	外体	小		II - III			
98田舎		182	SD377F1</td										

墨書き種 (駆文) ※1	報告番号 ※2	紀要番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種別	器種	残存率	墨書き 部位 規模	字体 濃淡	R P 番号	年代観	付着物	備考	墨書き種 (駆文) ※1	報告番号 ※2	紀要番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種別	器種	残存率	墨書き 部位 規模	字体 濃淡	R P 番号	年代観	付着物	備考	
117田高		267	III 40-37	須恵器	高台环	底片	外体 中	※3	※8 5※5	III - IV			188伴		63	SD625F 22-32	須恵器	环	体部片	外体 中	※3	※8 5※5	不明			
118田高		190	SD377	内黒土器	环	底完形	外底 外体	小	濃淡	131	II - III	未掲実測	189伴		64	SD625F 22-32	須恵器	环	体部片	外体 小	不明	濃				
119[田高力]		302	III 42-42	須恵器	环	底片	外底 中	半完形	外底 大	26	III	墨 硯	190伴		65	SD625F 22-32	赤燒土器	环	底片	外体 小	III					
120[呂]	102	525	SG200	須恵器	环	半完形	外底 外体	大		IV			191伴		66	SD625F 22-32	赤燒土器	环	体部片	外体 小	不明					
121[田口] [部力]		270	III 31-44	須恵器	环	底片	外底 外体	大		IV			192伴		202	551	SD625F 22-32	須恵器	环	底片	外体 中	325	IV			
122田		287	III 42-38	須恵器	环	底片	外底 外体	小		IV			193伴		224	552	SD625F 22-32	赤燒土器	环	底完形	外底 中	321 II - III	擦、汚	報告修正		
123[田力]		300	III 34-42	須恵器	环	底片	外底 外体	小		III			194伴		211	553	SD625F 22-32	内黒土器	环	体部片	外体 中	383	III - IV			
124上高		268	III 33-43	須恵器	环	底片	外底 中			IV		未掲実測	195丈上		190	554	SD625F 22-32	須恵器	环	完形	外底 中	244	IV	煤		
125上		193	SD377F1	内黒土器	高台环	底片	外底 外体	小		III - IV			196丈上		196	555	SD625F 22-32	須恵器	环	半完形	外底 中	341	IV	報告修正		
126一		206	SD377	須恵器	环	底完形	外底 外体	大	淡 濃	137	IV	墨 硯 未掲実測	197丈			SD625	78F1-F2 22-33	須恵器	环	底片	外体 小	III - IV				
127下高		269	III 33-43	須恵器	环	底片	外体 外底	小	濃 濃		III - IV		198丈		79	SD625F 22-33	赤燒土器	环	底完形	外底 小	IV					
128高		58	SD625F 22-32	須恵器	环	底片	外底 外体	小		III - IV	汚		199丈		107	523	SG200	須恵器	环	半完形	外体 小	5IV	擦、汚 煤			
129高		59	SD625F 22-33	須恵器	环	底片	外底 外体	小		III			200□		238	574	III 42-41	須恵器	环	半完形	外底 外体	小	濃 淡	III - IV	墨 硯 習字	
130高		61	SD625F 22-37	須恵器	环	底片	外底 外体	大		III			201王			72	SD625F 22-37	須恵器	高台环	底片	外底 小	III - IV				
131高		56	SD625F	須恵器	环	底片	外底 外体	小		IV			202王			73	SD625F 22-37	須恵器	环	底完形	外底 中	III - IV	墨 硯			
132高		57	SD625F1	須恵器	环	底完形	外底 外体	小		IV			203王			74	SD625F 22-32	須恵器	蓋	半完形	外体 小	II - III				
133高		60	SD625	須恵器	环	底完形	外底 外体	小		IV			204王		105	522	SG200	須恵器	环	底片	外底 小	12II - III	汚			
134高		197	557	SD625F1	須恵器	环	半完形	外底 外体	小	312	III - IV			205王		185	SD377F1	須恵器	环	底完形	外底 中	II				
135高		198	558	SD625F1	須恵器	环	半完形	外底 外体	小	261	III - IV	墨 硯		206王		186	SD377F1	須恵器	环	底片	外底 中	II	煤			
136高		84	571	SE181	須恵器	环	半完形	外底 外体	小	80	III	煤		207王		141	505	SD377F1	須恵器	环	半完形	外底 大	169	III - IV		
137高		112	517	SG200	須恵器	环	半完形	外底 中		399	III - IV			208王		152	506	SD377	須恵器	环	半完形	外底 大	94	II - III		
138高		104	518	SG200	須恵器	环	完形	外底 中		40	III	汚		209王		275	III 42-40	須恵器	环	底片	外底 小	II	III	汚		
139高		108	519	SG200	須恵器	环	半完形	外底 中		65	III - IV	煤		210王		276	III 35-40	須恵器	环	底片	外底 小	II	擦			
140高		174	34-43	赤燒土器	环	体部片	外体	中		不明			211王		240	575	III 31-44	内黒土器	环	外底	中	II	印刻			
141高		170	SD377F1	内黒土器	高台环	底片	外底 外体	小		II			212王		237	576	38-35	須恵器	蓋	半完形	外体 小	II - III	墨 硯			
142高		172	SD377F1 33-42	須恵器	环	底片	外底 外体	大		III - IV			213王		205	SD377	須恵器	环	底完形	外底 小	147	III				
143高		168	SD377F1 34-42	須恵器	环	底片	外底 外体	小		III	汚		214王		144	508	SD377F2	須恵器	环	半完形	外底 小	183	IV			
144□		169	SD377F1 34-42	須恵器	环	底片	外体 外底	中	淡 濃	III	墨		215善			88	SD625F 22-37	須恵器	环	底片	外底 中	IV				
145高		167	SD377F1	須恵器	环	半完形	外底 外体	中		III	煤		216善		109	524	SG200	須恵器	环	底片	外底 中	402	IV			
146高		173	SD377F1	赤燒土器	环	底片	外底 外体	中		III	波		217善		149	507	SD377F1	須恵器	环	半完形	外底 中	170	IV			
147高		175	SD377F1	須恵器	环	底片	外底 外体	小		IV	擦		218善		279	III 42-41	須恵器	环	底片	外底 中	III					
148高		176	SD377F1	須恵器	环	底片	外底 外体	中		III - IV			219善		204	SD	須恵器	环	底完形	外底 中	141	III - IV	擦、煤			
149高		146	503	SD377F1	須恵器	环	底片	外底 外体	中	176	IV	汚		220善		326	X-0	須恵器	环	底片	外底 中	III - IV	汚			
150高		163	SD377	須恵器	环	底完形	外底 外体	小	116	III	煤		221主		199	565	SD625F2	須恵器	环	底片	外底 小	390	III	汚		
151高		164	SD377	須恵器	环	底片	外底 外体	中	113	III - IV			222主			285	III 32-42	須恵器	高台环	底完形	外底 小	III - IV	擦			
152高		165	SD377	須恵器	环	底完形	外底 外体	中	113	III - IV			223貞		271	III 42-34	須恵器	环	底片	外底 中	III - IV		未掲実測			
153高		166	SD377	須恵器	环	底完形	外底 外体	大	136	III - IV	汚		224貞		272	III 32-44	赤燒土器	环	底片	外底 中	IV					
154高		171	SD377	須恵器	高台环	底完形	外底 外体	中	133	III			225毛		84	SD625F1	須恵器	环	底片	外底 中	III - IV	汚				
155高		147	504	SD377	須恵器	环	半完形	外底 外体	中	107	III			226毛		110	521	SG200	須恵器	环	半完形	外底 中	33	IV	汚	
156高		255	III 32-42	須恵器	环	底片	外底 外体	大		IV			227石			82	SD625F2 21-36	須恵器	环	底片	外底 大	IV				
157高		245	III 32-43	須恵器	环	底片	外底 外体	小		III			228石		192	559	SD625F1	須恵器	环	完形	外底 大	272	III - IV	漆		
158高		245	III 33-42	須恵器	环	底片	外底 外体	中		III	煤		229石		191	560	SD625F1	須恵器	环	半完形	外底 中	276	III - IV			
159高		243	III 33-43	須恵器	环	底片	外底 外体	小		III			230石		309	III 32-42	須恵器	高台环	底片	外底 中	III - IV	汚				
160高		249	III 33-43	須恵器	环	体部片	外体	中	不明				231石		290	III 33-43	須恵器	高台环	底片	外底 大	III - IV					
161高		259	III 33-43	須恵器	环	赤燒土器	底片	外底 外体	小		III	煤		232西		81	SD625F1	須恵器	环	底片	外底 中	刻	未掲実測			
162高		260	III 33-43	赤燒土器	环	底片	外底 外体	小		III			233西		192	34-42	SD377F1	須恵器	环	半完形	外底 中	III - IV	擦、汚			
163高		261	III 33-43	赤燒土器	环	底片	外底 外体	小		III			234山			194	SD377	須恵器	环	底完形	外底 大	95	III	擦、汚		
164高		251	III 34-42	須恵器	环	底片	外底 外体	大		IV	擦		235山		95	573	SK901	須恵器	环	底片	外底 小	494	III - IV			
165□		252	III 40-43	須恵器	环	底片	内底			IV	墨		236一			91	SD625F1	内黒土器	高台环	底完形	外底 中	III				
166高		242	III 40-45	須恵器	环	底片	外底 外体	中		III			237一			226	568	SD625F2	赤燒土器	環	底完形	外底 中	303	III		
167高		250	III 41-44	須恵器	环	底片	外底 外体	小		III - IV	擦		238一		227	569	SD625F2	赤燒土器	環	半完形	外底 中	III	煤			
168高		253	III 42-40	須恵器	环	底完形	外底 外体	中		IV			239一		200	570	SD625F1	須恵器	环	底完形	外体 大	257	IV	汚		
169高		246	III 42-41	須恵器	环	底片	外底 外体	大		III - IV			240五		117	526	SG200	赤燒土器	环	半完形	外底 大	400	II			
170高		257	III 42-41	須恵器	环	底完形	外底 外体	小		III - IV	煤		241七		194	567	SD625F2	須恵器								

墨書き種 (記文)	報告番号	紀要番号	遺構番号	種別	器種	残存率	墨書き部位	字体規格	字体濃淡	R P番号	年代観	付着物	備考
※1	※2	※2	※2	グリッド		※3	※3	※5	※5	※4	※6	※7	
255雀		280	III 27-41	須恵器	环	半完形	外底 小			III - IV		未掲実測	
256縦		232	SG200F2	須恵器	环	半完形	外底 大			202	IV	未掲実測	SD377 合
257米	106	520	SG200F1	須恵器	环	半完形	外底 中			IV			
258易		281	III 34-42	須恵器	高台环底片	外底 中				III - IV		未掲実測	
259甲		323	X-0	須恵器	环	底片	外底 大			III	擦	未掲実測	
260良		83	SD625F 22-32	須恵器	环	底片	外底 大			IV	擦・渋	未掲実測	
261矢		87	SD625F	須恵器	蓋	半完形	外底 小	淡淡		III	墨	硯	未掲実測
262有		293	III 31-42	須恵器	环	底片	外底 中			III - IV		未掲実測	
263□		218	SD377	赤焼土器	环	底完形	外底 外体			III - IV	墨	未掲実測	
264大	201	566	SD625F2	須恵器	环	完形	外底 小	359	III - IV	墨・渋	硯		
265+		86	SD625F	須恵器	环	底完形	外底 大			IV	渋		
266尔※		282	III 32-44	須恵器	环	底片	外底 小			III - IV		未掲実測	
267□[尔カ]※		207	SD377	須恵器	环	底完形	外底 中	149	IV				
268重		187	SD377F 33-42	須恵器	环	底完形	外底 大			III	渋	則天	未掲実測
269重		188	SD377	須恵器	环	半完形	外底 大	135	III	擦・渋	煤	則天	
270重		273	III 42-42	須恵器	环	底完形	外底 大			III		則天	
271重		274	III 33-42	須恵器	环	底片	外底 大			III	渋	則天	
272●	158	509	SD377F1	内黒土器	环	半完形	外底 小	179	II			記号	
273□[尔カ]		226	SD377F1	内黒土器	高台环底片	外底 中				II		記号	
274&		218	561	SD625F2	赤焼土器	环	半完形	外底 外体	濃濃	385	III - IV	記号	
275&		225	562	SD625F	赤焼土器	高台环底片	外底 外体	淡淡		375	II - III	記号	
276&		68	SD625F 22-32	須恵器	环	底片	外底 中			IV		記号	
277&		69	SD625F 22-37	須恵器	环	底片	外底 中			III - IV	墨	記号	
278&		70	SD625F 22-32	赤焼土器	环	体部片	外底 大			不明	墨	記号	
279&		71	SD625F	赤焼土器	环	底片	外底 中			III - IV		記号	
280○		89	SD625F 22-35	須恵器	环	底片	外底 小			III - IV		未掲実測	
281○		289	III 42-43	須恵器	环	底完形	外底 中			IV	擦	記号	
282□[尔カ]		106	SD625F	須恵器	环	底片	外底 中			III - IV	墨	記号・硯	
283○		283	III 35-40	須恵器	环	底片	外底 中			IV		未掲実測	
284×		232	578	SD640F1	赤焼土器	环	完形	外底 中	473	IV	煤	印刻	

※1 稽文の力括弧は破片で推定したもの。□は墨痕が薄いか判読したものを表す。

※2 報告番号は報告書番号を表す。紀要番号は本稿紀要番号を表す。

※3 残存率は底部を主に墨書の有無を判断するもので、完形は底部全体ほぼ残存。半完形は底部残存体部一部欠損。底完形は底部残存体部欠損。底片は底部欠損を表す。

※4 年代観は「第2回土器変遷図」に従う。

※5 字体規格は墨書き字全体の相対的な大小中、字体濃淡は部位や字体複数の場合の相対的濃淡を表し、同一字種の場合は部位を表す。

※6 内面底部を主に明らかな付着物等を表し「墨」は墨汁、「漆」は漆、「煤」は煤、「渋」は渋状の付着物、「擦」は明晰な摩滅痕跡等が認められるものを表す。

※7 「報告修正」は報告書修正図(第7図)、「未掲実測」は未掲載墨書き土器実測図(第12・13図)を表す。硯は墨汁や擦痕跡等から明らかに転用硯と考えられるものを表す。

※8 外・内は外面・内面、底・体は底部・体部を表す。

第10図 墨書き土器記文表(3)

墨書き種	出土遺構							全字 計	全文 字数 ※1 ※1	墨書き部位※2				
	S D 625	S D 377	S G 200	S B 22	S E 2	III 4	その他 5			外底 67	外体 67	内底 54	内体 247	その他 58
判読可能土器	137	56	22	2	4	59	5	285	67	54	247	58	4	3
判読不明(□)	66	19	8	3		27		123			90	34	1	2
計	203	75	30	5	4	86	5	408		337	92	5	5	443
組成率(%)	49.8	18.4	7.4	1.2	1.0	21.1	1.2	100		76.1	20.8	1.1	1.1	0.9

※1 全字種類数は1文字や複数文字、記号も含めた文字の種類数を表し、全文字数は使用される文字(漢字)や記号の数を表す。

※2 外・内は外面・内面を表し、底・体は底部・体部を表す。

※3 1個体に複数数字が、部位が異なり墨書きされるため数量が異なる。

第11図 全墨書き土器概要表

支出残高を記す公糧支給に関する記述も注目している。

先学の文献史から本遺跡主体の9世紀中～後葉の出羽国軍制を概観すれば、1戸正丁の1/3を徵兵した出羽軍団兵士1,000人(弘仁六年〔815年〕私糧、後番上糧8合〔穀・米〕/日)と、諸郡からの鎮兵650人(長上糧1升6合〔穀・米〕/日)、弘仁年間に設置された健児880人(列土:出舉稻健児糧料5,8412束〔穎稻〕/年)

の計2,530人が公糧を支給される本来の主な兵力で1府2城(秋田城・雄勝城)に配置されていた。

しかし、9世紀後葉の元慶の乱(878年)の翌年出羽権守藤原保則は「承前国司、无置一人」と上奏し、実際には同乱以前に「列兵」がほとんど置かれない状態が続いた事が窺える。

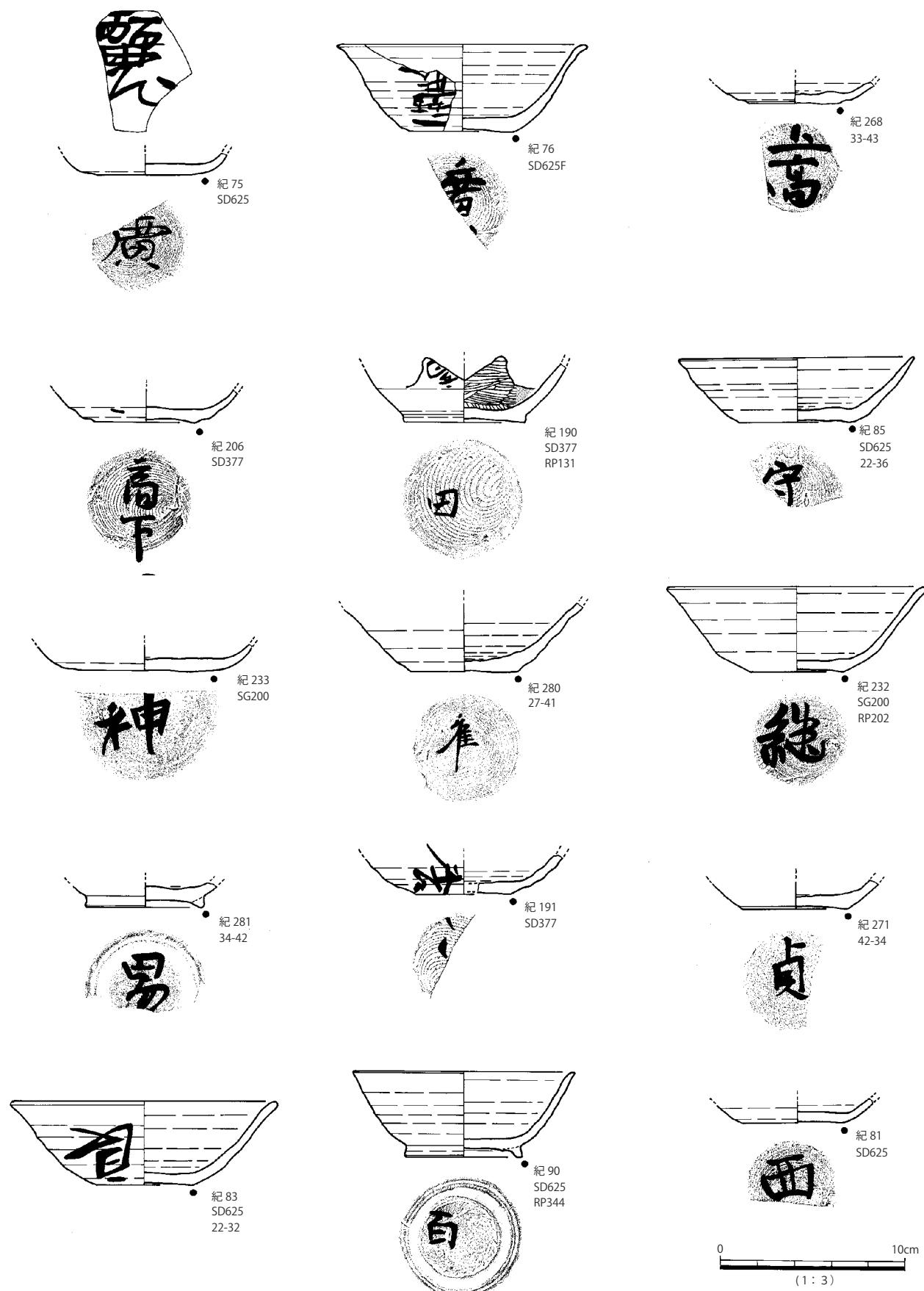
これら上記の木簡の存在は、本遺跡が木簡(郡符木簡)の差出し、受取りに関わる遺跡か、それと同レベルの木簡が廃棄されうる遺跡と推測される。更に第2・3号木簡は、前述記事を勘案すれば、同乱前後の社会的緊張に起因する事も推測され、共伴する新相の土器群(IV期)と対応するであろう。また、5斗1俵を基準とする公糧は、この木簡記載段階では既に春米化され運搬に適した単位や状態で保管収納されていた可能性もあり、後述する倉庫の形態とも合わせ、報文で平川氏が指摘する「当時の役所(性格不明)の一部」の可能性が強く窺える。

4 検出遺構の再検討

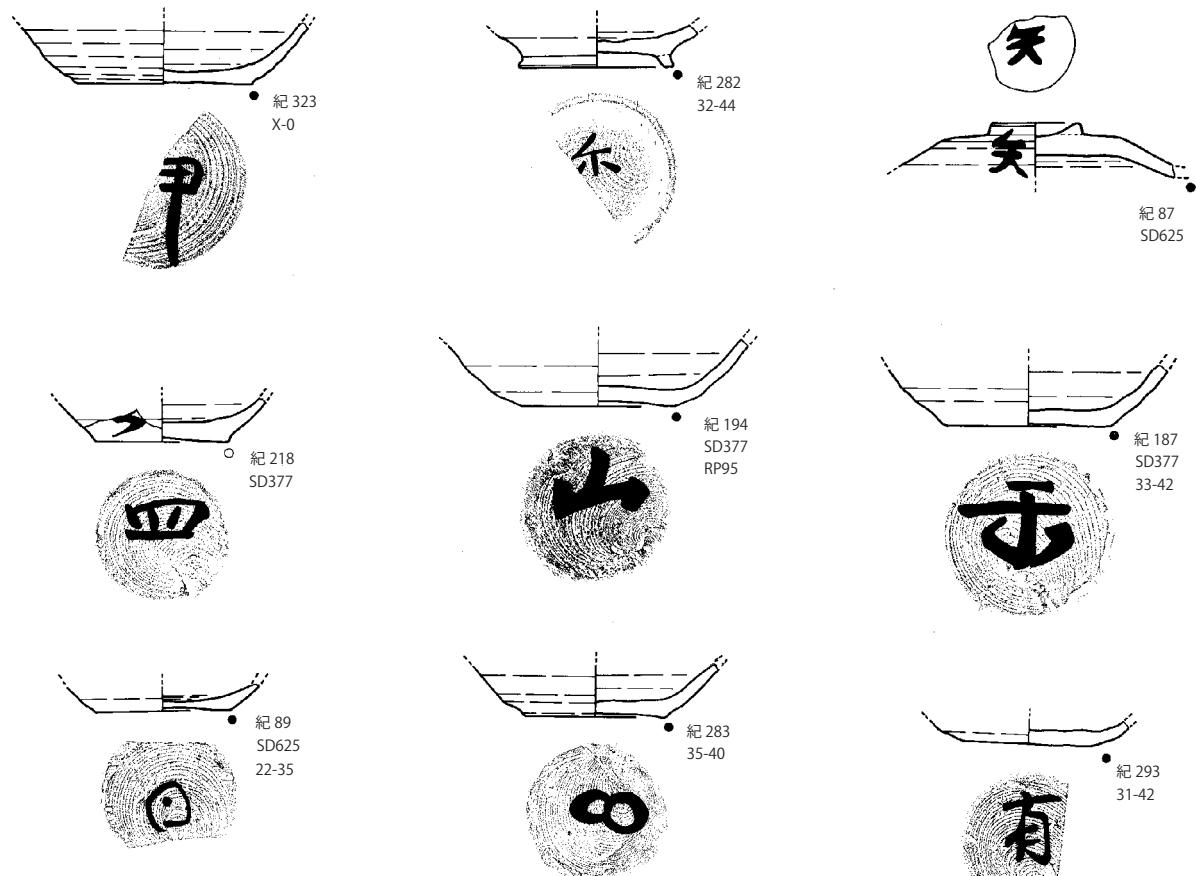
本遺跡では10棟⁴⁾の掘立柱建物跡(以下、建物と記す)が検出され、一部3時期の重複関係もあるが「他の建物を含め(中略)より近接した年代での変遷」とし、「時期幅も9世紀内に納まる」ものとした。本遺跡は当該地域(最上郡内)の一般集落に多く見られる竪穴住居(1982渋谷)がなく、建物跡だけで構成される。しかし、前述『山形県の官衙関連遺跡』では、文字関係資料が出土する遺物状況は官衙的様相を示すのに比べ、「遺構の規模、配置等に計画性はみられない」特徴を指摘する。

近年、本遺跡のある古代最上郡内の調査例の増加から遺跡相互の比較等が少しづつ可能になっている。本稿では総柱建物を高床倉庫と判断し、梁行に比して桁行が5間以上の長大な建物を所謂長舎建物と称し、本遺跡で特徴的な総柱建物(SB2)や長舎建物(SB3)の形態(間尺)に注目した。そして、同郡内で面的な調査により上記建物が検出される遺跡を集成(第1・18・19図)し、主な遺跡(限定された調査区で全体不明確を除く)の建物形態や構成等から分類(第15～17図)を行い、建物形態と規模の比較分布図(第20図)を作成した^{5・6)}。

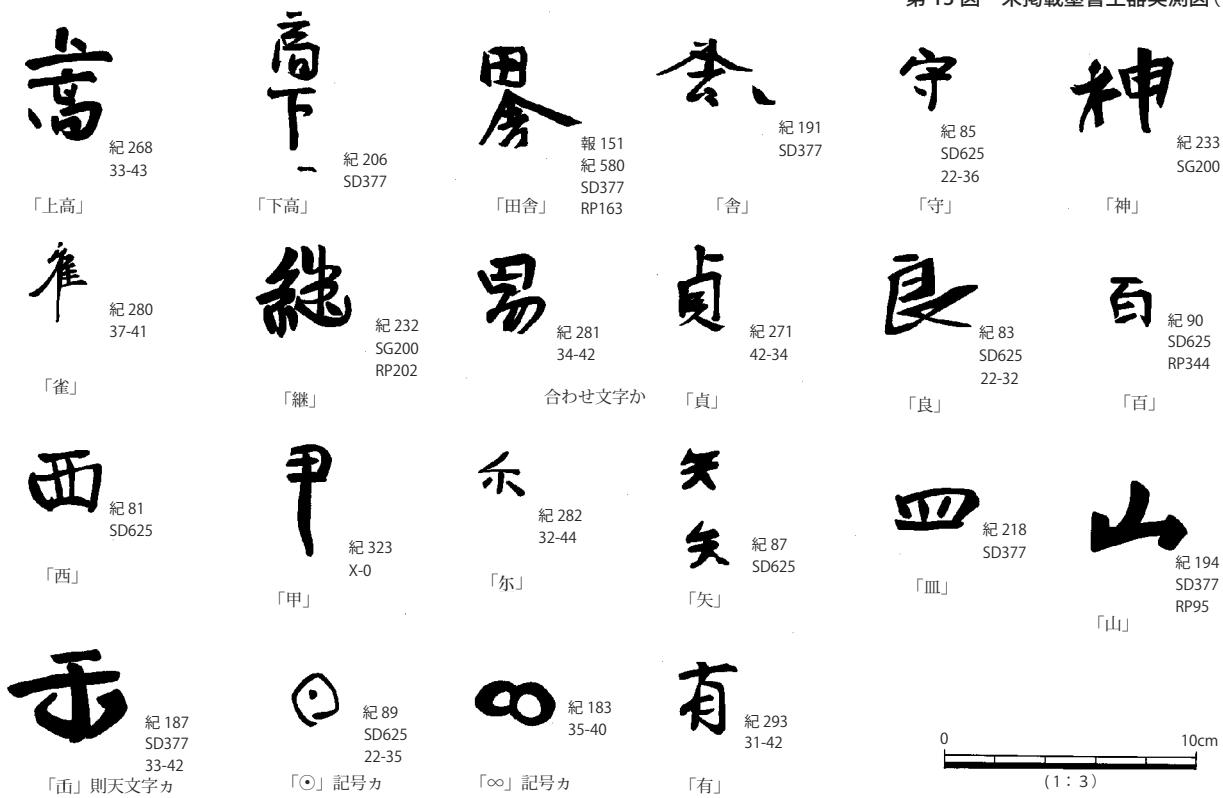
詳細は別稿に譲るが、同郡内では全体に総柱建物は2×2間の形態が一般的で、形態毎に規格性や集落構成等の相違等がみられた。以下に概略する。



第12図 未掲載墨書き土器実測図(1)



第13図 未掲載墨書き土器実測図(2)



第14図 未掲載墨書き文字記号集成

A 総柱建物(高床倉庫) 本遺跡では 2×4 間(S B 2)の中型の総柱建物(A 1類:以下、倉庫と記す)が検出され、柱根や根固石や支柱痕等も確認された。同形態・規模の建物は中山町達磨寺遺跡のみに認められ、S B 96は全体に廂を持つ差異はあるが、規模的にはほぼ同規模の構造である。達磨寺遺跡は竪穴住居と併存する集落構成(A 2類)が本遺跡と異なるが、石帶や灰釉陶器、鍛冶遺構等の官衙関連(官人層)的な様相を呈する。

他方、それ以外の倉庫とその遺跡を概観すれば、前述小型の 2×2 間の形態が一般的である。これらには、基本的には集落が建物跡(倉庫群)で構成され(竪穴住居が併存するが立地が異なるもの含む:梅ノ木)ほぼ同規格の倉庫群が直列やL字形に並ぶもの(B類)があり、特に区画施設を有する一群(境田B・吉原I・石田:B 1類)等もある。また、同形態ながら集落構成が竪穴住居等と併存し単体で検出されるもの(C類)がある。この中には、建物跡の性格上、時期幅の検討は要するが、集落が建物(倉庫)群に後続(9世紀末葉)して竪穴住居に変移縮小するもの(漆山長表:C 1類)や、併存し規格性が乏しい傾向のもの(一ノ坪:C 2類)等がある。他に大型のタイプ(D類)もあるが、瓦を焼成した窯跡との関連が窺える(第18・19図)。

B 長舎建物跡 本遺跡の 2×5 間(S B 3)が相当し、同形態の検出は山形市成沢遺跡(S B 1・2)のみである。当遺跡は綠釉陶器等が出土し規模的にも大型である。長舎建物は、県内では『山形県の官衙関連遺跡』でも基準にした官衙的な遺跡に多く、官衙主体部である「政庁」や「館」、実務機関の「曹司」的建物と考えられる。

5 まとめ

本稿では今塚遺跡の特に溝跡の墨書土器と特徴的な建物群について再検討を加えた。以下に本遺跡の遺構と遺物の変遷、当時の最上郡の様相を整理してまとめとする。

本遺跡の出現時期は、前述土器編年のI期(8世紀後半~9世紀初頭)と考えられる。しかし、量的に微量で遺構は判然とせず、S D 377・640の溝跡が認められる程度である。墨書土器は「神」等がやや後れて(9世紀初頭~前葉)始めて散見される。周辺に古墳時代の有力遺跡があり在地勢力の成長が成因であろう。

I期は、出羽国で宝亀の乱(778年)が起こり、国府

が秋田城から南下する段階(延暦~弘仁年間)で、在地勢力の「復」(押切2001)等のため延暦11(792)年に最上郡の田租、弘仁2(811)年に調庸が免除される。一方でこの時期は本遺跡で確認される郡雜任「郡書生」が郡毎に規定(822年)され、郡衙正倉の倉庫群を各郷毎等に分散(795年)、収穫した近辺に小院設置(823年)等が規定される。これらは全体に律令的制度により在地勢力が拡充した可能性を示し、次期以降に増加する本遺跡の一因になろう。

II期(9世紀前~中葉)から墨書土器の量が一定量散見され、「高」や「王」、「八」、「守」等の限られた字種に多い。S B 1(「宅」)が本段階頃と推測される。

III期(9世紀中~後葉)から多様な墨書土器群の増加が認められ、本遺跡の主体を為す段階と捉えられる。建物もS B 6(「一麗」)・716等で同時期の遺物が確認され、上記S B 1とほぼ主軸を南北軸に取る建物群や倉庫群(S B 2他)、S E 181 井戸跡等がII~III段階で形成される。全体的にはS D 377 溝跡も同様に当期で主体を為し、共伴する「調所」や「一等書生伴」もこの段階と考えられ、S D 967の第1号木簡(仁寿三年:853年)が年代観を付与する。

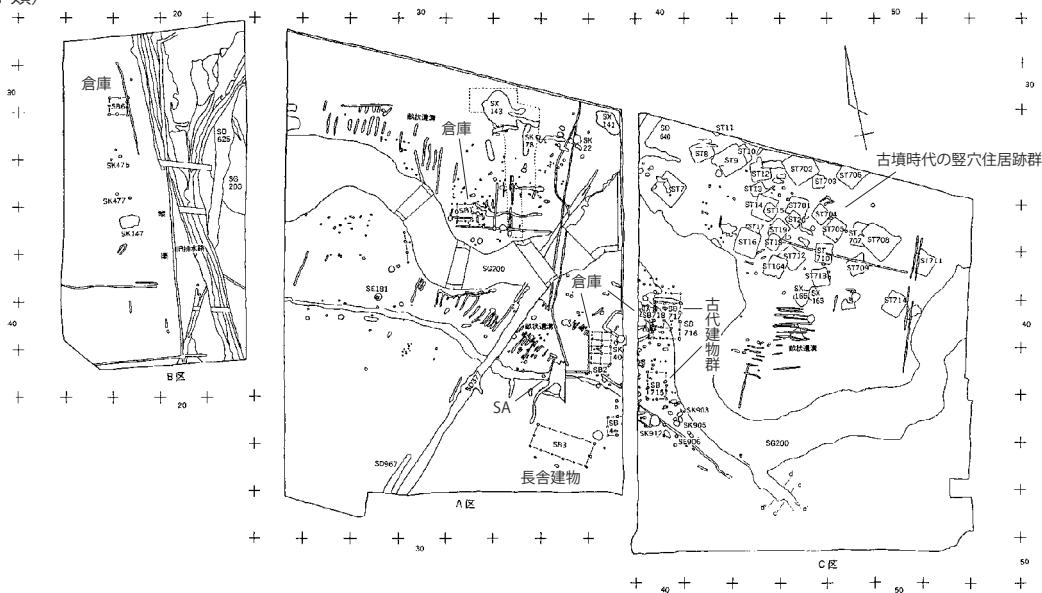
II~III期は、当国で地震(830・850年)や飢饉(841年)、鳥海山噴火(871年)等の自然災害が続発し、承和3(843)年には倉庫内の調庸が欠け、「境接夷落」状態になる。これに行政は嘉祥3(850)年に租調の免除や、「倉廩」を開き(穀・穎の)貸振、陰陽師の派遣依頼等で対処した。本遺跡の「調所」収納物もこれら災害に対応した事が推測され、本来蝦夷への夷禄等の「調」(穀・米)が、第2号木簡の兵士の食糧支給に変容した可能性がある。また、次期の陰陽道系と推測される「生・一麗」墨書土器群の祭祀も災害で困窮した社会背景の中で行われた事も考えられ、上記の関連が窺える。

IV期(9世紀後葉)はIII期より新相で出土量はIII期と同様である。S D 625 溝跡はIII~IV期に主体的に祭祀も当期の所産であろう。S D 377も同時期まで機能する事が窺え、「田宅」・「田舎」墨書土器も確認される。他建物群と主軸を異にする唯一のS B 3長舎建物はS D 377とほぼ直交し、全体の土器出土量等と勘案すれば新相の建物と考えられ、上記墨書土器の可能性もある。

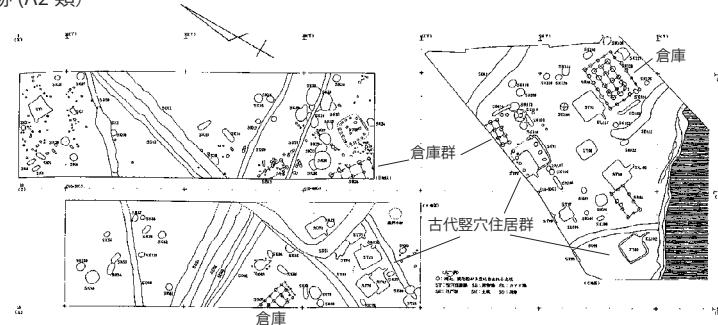
IV期は本遺跡の最終段階に当たり、前期からの流れで

A類：2×4間総柱倉庫を有する遺跡

今塚遺跡(A1類)



達磨寺遺跡(A2類)

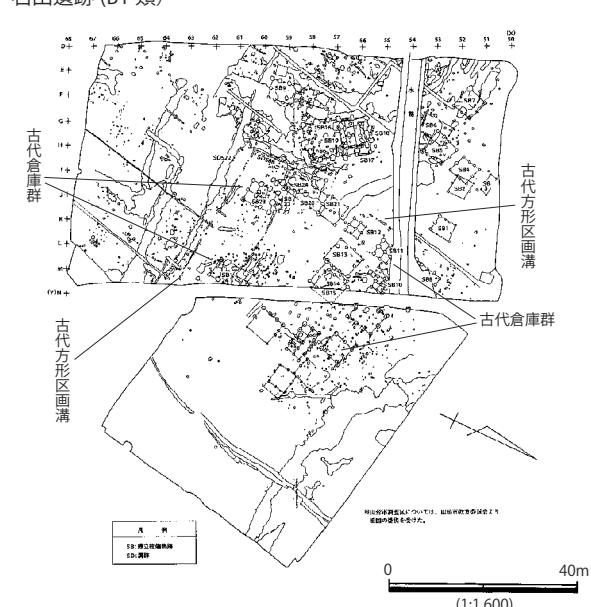


B類：2×2間の総柱倉庫が列状にやし字型並ぶ遺跡

吉原I遺跡(B1類)



石田遺跡(B1類)

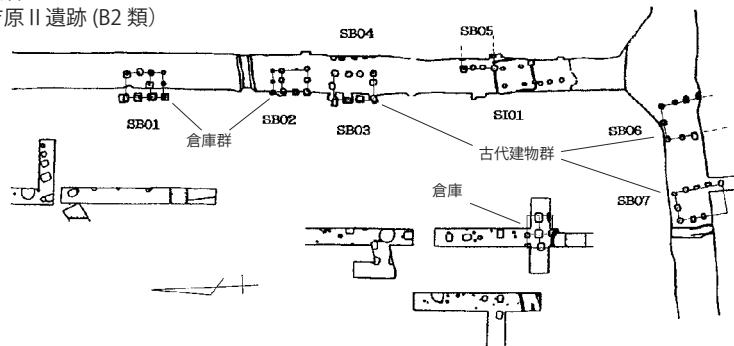


※ 全て同スケール

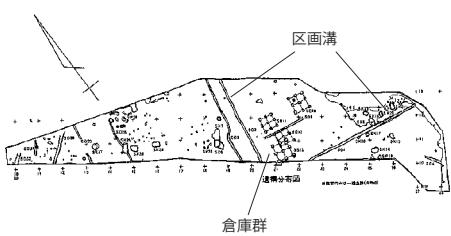
第15図 総柱建物（倉庫）を有する遺跡分類図（1）

B類

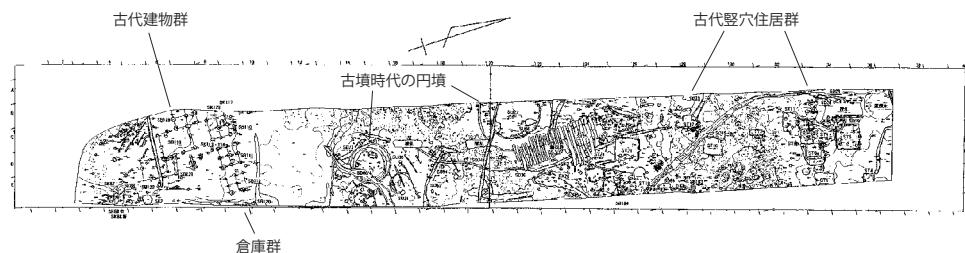
吉原II遺跡(B2類)



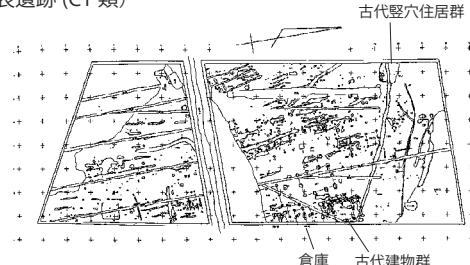
I境田B遺跡(B1類)



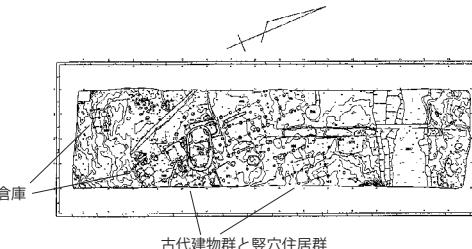
梅ノ木遺跡(B2類)



C類：2×2間の倉庫が単体で検出される遺跡
漆山長表遺跡(C1類)



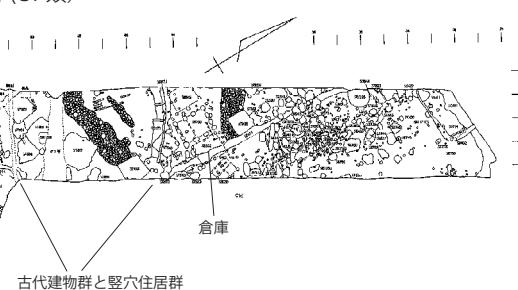
一ノ坪遺跡(C2類)



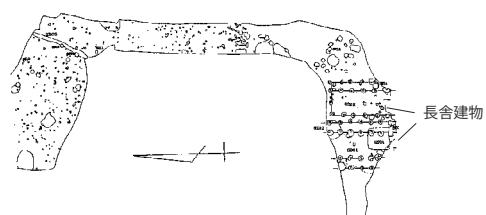
D類：2×6間以上の大型の倉庫のある遺跡
オサヤズ窯跡



永源寺遺跡(C1類)



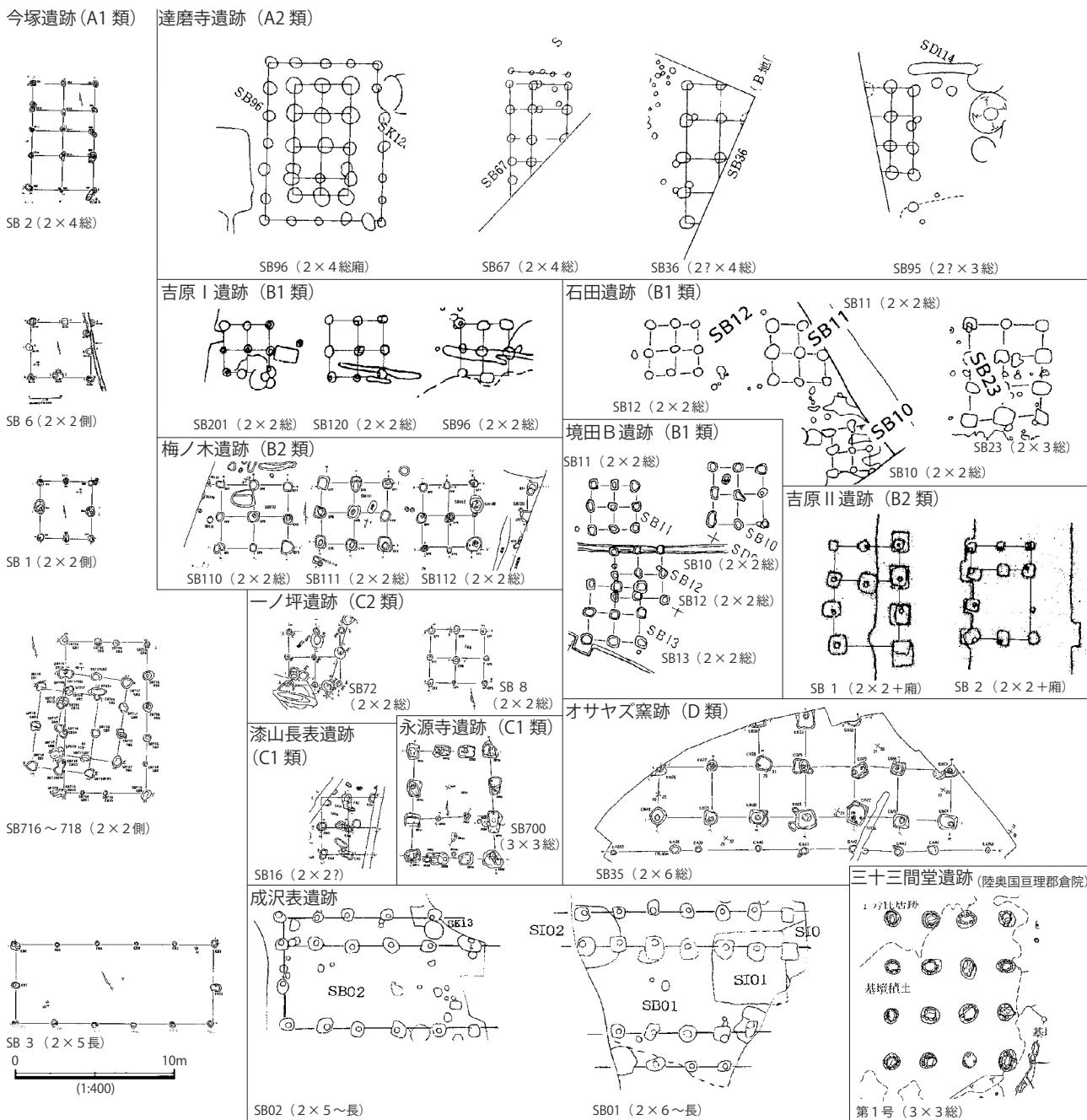
長舎建物のある遺跡
成沢遺跡



0
(1:1,600)
40m

※ 全て同スケール

第16図 総柱建物（倉庫）・長舎建物を有する遺跡分類図（2）



第17図 総柱建物(倉庫)・長舎建物の遺跡別平面図集成

遺跡名	集落構成	建物NO.	間尺	規模(m)	床面積	付属施設等	配置(他SB等)	建物方向(磁北比)	主体時期	時期資料	備考	報告書	年度
今塚	S Bのみ	SB716	3×5	5.2 9.6	49.9	並行	やや東傾	9C前～中	E P土器・溝土器	同上	セン7	1994	
		SB3	2×5	5.0 12.5	62.5	不規則	西傾	9C中	溝と直交方向				
成沢西	S B集中	SB1	2×6～	5.5 13.2	72.6	東西廊	併行	磁北	9C後	S T重複・緑釉	緑釉陶器出土	山形市	現況
		SB2	2×5～	5.2 11.7	60.8	東廊		～10C前			※床面積は現存長		1998

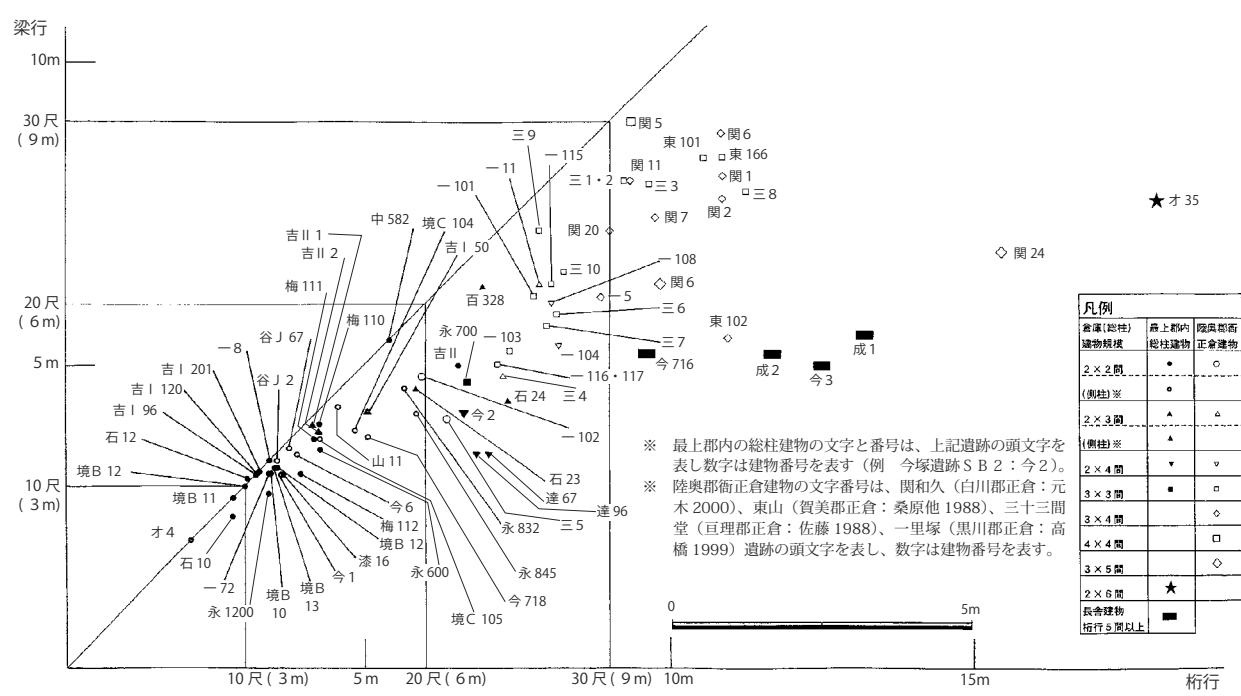
- ※1 S Bのみ: S B(掘立柱建物跡)だけで構成される遺跡。S B集中: S T(竪穴住居)も存在するが分布や時期に差異がある遺跡。S B・S T共存: 分布・時期的に並立する遺跡を表す。
- ※2 ≈印は、形態的(2×2間の等間尺等)に倉庫と判断されるが、側柱の建物を表す。「～」は調査区外に延び形態が不明などを表す。
- ※3 建物の主体時期は、遺構の性格上判断が難しく、報告書を基に建物と重複・併行関係にある溝跡や竪穴住居、遺跡全体の土器群等から判断した。
- ※4 セン: 山形県埋蔵文化財センター調査報告書、埋文: 山形県埋蔵文化財調査報告書、山形市現況: 山形市教育委員会現地説明会資料を表し、数字は報告書番号を表す。本文で引用文献に変える。

- ※5 A類: 2×4間総柱建物(倉庫)のある遺跡(A1:S Bのみで構成される遺跡)
A2: S BとS Tが共存する遺跡)
B類: 2×2間総柱建物(倉庫)を主体に直列やL字形に並ぶ遺跡(B1: 区画施設等が認められる遺跡。B2: 区画施設等が未検出な遺跡)
C類: 2×2間総柱建物(倉庫)等を単体で検出する遺跡(C1: S TもあるがS Bの分布や時期が異なる遺跡。C2: S BとS Tが共存する遺跡。C3: 調査区の制約から全体不明な遺跡)
D類: 2×6間総柱建物(倉庫)等の特殊な大型倉庫を検出する遺跡

第18図 古代最上郡の長舎建物(側柱建物)の規模

遺跡名	集落構成 ※1	建物 NO.	形態 (間尺) ※2	規模 (m)	床面積 (m ²)	付属 施設他	配 置 (主 SB 比)	SB 方向 (磁北)	主体時期 ※3	時期資料 ※3	備 考	報告書 ※4	年度	分類 ※5	
今塚	SBのみ	SB2	2×4	4.2	6.6	27.7	併行	やや東傾	9C中～後	SB方向・溝土器	都符木簡・「調所」、 「一等書生伴」等の 墨書き器多数出土。	セン7	1994	A 1	
		SB1	2×2※	3.6	3.3	11.9				EP土器・SB方向					
		SB6	2×2※	3.5	3.8	13.3				SB重複・SB方向					
		SB718	2×2※	5.0	3.8	19.0									
達磨寺	SB・ ST共存	SB96	2×4	3.5	6.8	23.8	総廂	併行	やや東傾	9C中～後	ST土器・SB方向	石帶・灰釉陶器出土。 鍛冶遺構多数検出。	埋文 104	1986	A 2
		SB67	2×4	3.5	7.0	24.5	東廂								
		SB36	2×4		8.8										
		SB95	2×3		5.2										
吉原I	SB集中	SB96	2×2	3.2	3.2	10.2		併行	ほぼ磁北	8C末 ～9C前	出土土器	方形区画溝(約80m)有 SB96～201の3棟直線 等間隔で並ぶ。	山形市 現説	1998	B 1
		SB120	2×2	3.2	3.2	10.2									
		SB201	2×2	3.2	3.2	10.2									
		SB50	2×2※	3.9	5.0	19.5	西廂								
石田	SBのみ	SB10	2×2	2.8	2.5	7.0		併行	ほぼ磁北	8C末 ～9C中	EP土器・方向	方形区画溝(約55m)有 SB10～12 L字配置。 SB23・24並列配置。 他に市教委調査実施。	セン 現説	2000	B 1
		SB11	2×2	3.5	3.3	11.6									
		SB12	2×2	3.1	3.0	9.3									
		SB23	2×3	4.6	5.8	26.7									
境田B	SBのみ	SB24	2×3	4.4	7.3	32.1		併行	磁北	8C末	区画溝土器	区画溝(約25m～)有り。 SB10～13 L字配置。 SB12・13重複関係。	埋文 111	1987	B 1
		SB13	2×2	3.3	3.5	11.6									
		SB10	2×2	3.2	3.4	10.9									
		SB12	2×2	3.0	3.0	9.0									
境田C	SBのみ	SB104	2×2※	3.9	4.8	18.7		併行	磁北	9C中～後	出土土器	2棟が直線に並ぶ。 付符木簡、風字硯出土	埋文 62	1982	B 2
		SB105	2×2※	3.8	4.2	16.0									
		SB110	2×2	4.0	4.2	16.8									
		SB111	2×2	3.8	4.1	15.6									
梅ノ木	SB集中	SB112	2×2	3.2	3.9	12.5		併行	磁北	8C末 ～9C前	EP土器・SB方向	SB110～120直線 等間隔で4棟並ぶ。 SB119とL字配置。 8世紀前～中葉ST有り	セン 78	2000	B 2
		SB120	2×2～	3.4											
		SB119	2×2～	4.7											
		SB1	2×2	4.0	4.1	16.4	南廂								
吉原II	SB集中	SB2	2×2	3.9	4.2	16.4	北廂	併行	磁北	8C末 ～9C前	ST重複・SB方向	SB1～4同軸線上並ぶ SB1・2対面して廂付	山形市 現説	1998	B 2
		SB4	2×2～	4.4			南北廂								
		SB	2×2	5.0	6.5	32.5									
		SB119	2×2	3.3	3.6	11.9	西柱列								
永源寺	SB集中	SB700	3×3※	4.8	6.6	31.7	南床東	併行	磁北	8C後～末	EP土器・SB方向	9世紀後半ST有り	セン 58	1998	C 1
		SB832	2×2※	4.6	5.6	25.8									
		SB845	2×2※	4.2	5.8	24.4									
		SB650	2×2	3.6	4.2	15.1									
一ノ坪	SB・ ST共存	SB1200	2×2※	2.9	3.4	9.9		不規則	やや西傾 やや東傾	9C後	SB方向	SB110～120直線 等間隔で4棟並ぶ。 SB119とL字配置。 8世紀前～中葉ST有り	セン 78	2000	C 2
		SB8	2×2	3.4	3.4	11.6									
		SB72	2×2	3.2	3.4	10.9									
		SB11	2×2※	4.3	4.5	19.4									
山形西高	SB集中	SB119	2×2	3.3	3.6	11.9	西柱列	併行	磁北	8C末～9C前	出土土器	ST主体でSB集中域有り	県現説	1997	C 2
		SB700	3×3※	4.8	6.6	31.7	南床東								
		SB832	2×2※	4.6	5.6	25.8									
		SB845	2×2※	4.2	5.8	24.4									
百目鬼	SB・ ST共存	SB650	2×2	3.6	4.2	15.1		不規則	やや西傾 やや東傾	9C後～10C初	出土土器	SB700床束有り。 SB700・832・845が並列。ST～SB併行。	セン 86	2001	C 1
		SB325	2×3※	3.2	5.3	17.0									
		SB326	2×3※	4.9	6.0	29.4									
		SB327	2×3※	4.8	6.3	30.2									
中袋	SBのみ	SB328	2×3	6.3	6.9	43.5		不規則	東傾	9C後～10C初	グリッド土器	SB650・1200方向異なり規模小、中世か。	セン 96	2002	C 2
		SB582	2×2	4.2	4.4	18.5									
		SB95	2×3※	4.1	4.3	17.6									
		SB4	2×2※	2.1	2.1	4.4									
オサヤズ 窯跡	SBのみ	SB35	2×6	7.6	18.0	136.8	東柱列	併行	西傾	8C末～9C初	瓦出土 出土土器	瓦窯跡検出。 中世遺物有り。	セン 72	2000	D
		永1200	2×2	3.6	3.3	11.9									

第19図 古代最上郡の倉（総柱建物等）の形態と規模



第20図 総柱建物倉庫と長倉建物の形態比較図

元慶の乱(878年)が起こり、仁和3(886)年には最上郡が村山郡と分郡され、人口増加や田地開発に伴うものと推測される。本遺跡の最終末は概ねIV期以降、急激に希薄になり前述両溝跡の覆土に砂を含む事から河川の氾濫等による移転や廃棄が考えられる。

一方、本遺跡の具体的な性格は、一連の墨書き土器や木簡等の遺物相、同郡内で単体で比較すれば特異な形態の総柱建物(倉庫)や長舎建物の遺構群等の構成から、報文でまとめた「一般農村と規定するよりは役所的な機能を備えた集落、或いは祭祀関連の集落」と捉えられる。

更に本稿の遺物再検討や隣国郡倉等の遺構群と比較した結果、『一般的な郡倉群よりは下位レベルで穀類(約千斛)⁷⁾を収納した「役所(郡の特別倉庫:調所)的な機能を備えた』郡司以下の郡書生が複数活動し「祭祀」活動も行う官人層の「集落(居宅)』と考えられる。

具体的な官人層は不明だが、「郡衙の出先機関(山中1994)的な「調所」(倉庫)と「田宅」「田舎」⁸⁾(居宅)を合わせ持つ存在の在地豪族で、墨書き土器群にやや年代幅があり出土量が多い「高」に関わる人物と判断する。

最後に墨書き土器の観察、釈文に当たって三上善孝氏、

北野博司氏、村木志伸氏、齋藤俊一氏、伊藤邦弘氏、押切智紀氏に御協力、御指導を得た。また本稿を作成するにあたり佐藤庄一氏、須賀井新人氏には多大な御指導を受けた。記して感謝を述べたい。

註

- 1) 「報」は報告書の遺物番号、「紀」は紀要番号を表す。
- 2) 報告書の土層断面等から一連のものと判断される。
- 3) 押切智紀氏の御教示による。
- 4) 報告書では明らかな建物として9棟としたが、S B 3の北西、ほぼ同方向の全て礎板を持つ3基(S P 43他)の柱穴からなる建物の可能性もある柱列(S A)が検出されている(第15図)。
- 5) 側柱建物でも2×2間等の方形形態を倉庫として抽出した。
- 6) 特に総柱建物は所謂郡倉との比較から隣国陸奥国の主な郡倉院と推定される遺跡の総柱建物(礎石含む)も併記した。
- 7) 村松恵司氏(松村1998)は文献史等との比較により床面積から収納量を指摘する。
- 8) 「田舎」は「城堡」で著名な『軍防令』東辺条の「堪営作者」義解に見え、土器年代は異なるが遺跡の性格上示唆的である。

引用文献

- 阿部明彦 1998「庄内平野の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会』
- 阿部明彦 1999「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会』
- 伊藤邦弘・植松暁彦 1999「山形県の官衙関連遺跡」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会』
- 井上光貞他 1976『律令』岩波書店
- 植松暁彦 1997「庄内高瀬川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古第6巻』
- 岡田荘司 1994「陰陽道祭祀の成立と展開」『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会
- 尾形與典 1998『山形県内出土古代文字資料集成』山形県の古代文字資料を考える会
- 押切智紀他 1997「出羽国設置と米沢」『米沢市史』
- 押切智紀 2001『永源寺跡遺跡発掘調査報告書』(財)山形埋蔵文化財センター
- 柏倉亮吉他 1979「出羽国府の整備と郡衙制」『山形県史』 山形県
- 加藤稔他 1996『図説山形県の歴史』河出書房新社
- 金子裕之 1999「仏教道教の渡来と蕃神崇拜」『古代史の論点5』 小学館
- 北村優季 1997「律令国家と出羽国」山形考古学会発表要旨
- 木元元治他 2000「陸奥国南部各郡の資料 白河郡」『第26回城柵官衙遺跡検討会』
- 桑原滋郎他 1988『東山遺跡II』宮城県多賀城跡調査研究所第12冊
- 佐藤庄一 1998『平野山古窯跡第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター
- 佐藤則之他 1988『亘理町三十三間堂遺跡』宮城県教育委員会第27集
- 佐藤信 1977『日本古代の官都と木簡』吉川弘文館
- 渋谷孝雄 1982『境田C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第62集
- 須賀井新人・植松暁彦 1994『今塚遺跡発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター第7集
- 高橋栄一他 1999『一里塚遺跡第44・47次発掘調査報告書』宮城県教育委員会第179集
- 仲野博他 1999『古代出羽文献・出土文字資料集稿』東北芸術工科大学歴史遺産研究協議会
- 平川南 2000『墨書き土器の研究』吉川弘文館
- 松村恵司 1998「正倉の存在形態と機能」『古代の稻倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 水野正好 1997「都市と流行する病(1)」『信仰関連遺跡調査課程』奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
- 山中敏史他 1998『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』奈良国立文化財研究所
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』株式会社塙書房
- 横山昭男他 1998『山形県の歴史』山川出版社